慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アラビアン・ アダム : The Spider's Houseにみるエキゾティック・ ホモセクシュアリティ
Sub Title	Arabian Adam : exotic homosexuality in Paul Bowles's The Spider's House
Author	大串, 尚代(Ogushi, Hisayo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.238(143)- 257(124)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0257

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アラビアン・アダム
——*The Spider's House* にみる エキゾティック・ホモセクシュアリティ——

大串　尚代

モロッコの古都フェズは，今なお中世の佇まいを残すメディナと，フランス支配により造られた近代的な新市街が併存する混沌と魅惑に満ちた邑である。モロッコ独立運動が盛んになった1950年代，この邑が緊張に包まれた数日間があった。1953年，フランスはアラウィー朝のスルタンであるムハメド・ベン・ユーセフをマダガスカルに追放し，傀儡スルタンを擁立する。傀儡スルタンを認めず，モロッコ独立を求める独立党（イスティクラル）の活動は日増しに活発になり，ついに1954年の「羊の犠牲祭」当日にフランス軍と独立党の緊張関係が最高潮に達した。それは独立党の煽動による叛乱を恐れたフランス軍が，フェズのメディナを包囲するという事態が起きたためだった。こうした混乱期を背景に，フェズに滞在したアメリカ人作家，彼と行動をともにするアメリカ人女性，そしてメディナに住む少年の3人が織りなす物語は，ポール・ボウルズ（1910-）最大の長編 *The Spider's House* と題され，モロッコ独立前年の1955年に出版された。

1）実存主義からエキゾティシズムへ

弱冠18歳で国際的文芸誌 *Transition* に詩が掲載され，ポール・エリュアール，アンドレ・ブルトンらと名を連ねたボウルズは，ガートルード・スタインの勧めでモロッコに足を踏み入れたと言われている。ボウルズはモダニズム全盛の時代に青春を送り，その後作曲家として活躍するが，妻であった作家ジェイン・ボウルズの影響で小説を書き始めた。1949年に処女長編 *The Sheltering Sky* を発表して以来，モロッコを舞台にした小説

を数多く残しているが，しかし1967年以降にはほとんど自国アメリカには戻らなくなったため，ボウルズの存在は次第に忘れられていくことになる。ところが，80年代に入りブラック・スパロウ出版が長らく絶版だったボウルズの作品を復刊したことがきっかけとなり，現在にまでいたるボウルズ再評価につながったことは記憶に新しい。

ボウルズの批評史は主にこの80年代以降の再評価以後のものになる。試みにこれらの批評を大別するならば次の三つに分けられるだろう。まず第一の流れは実存主義的な要素をテクストに読み込んでいく批評である。例えばマーセレット・G・ウィリアムズは *The Sheltering Sky* における時間の機能と主人公たちの不安・人格崩壊とのつながりを論じており，またウィリアム・パットソンはボウルズ作品に登場する外部にいる者の不安や恐怖に焦点を当てた分析を繰り広げる。第二の流れとしては，ゴシック・ホラー作家としての評価があげられる。これはボウルズが西欧文化から離れた異世界，他者の世界での幻想的な出来事を，マジック・リアリズムとも呼べる手法で描いていることに注目した評価である。日本でも八木敏雄氏や風間賢二氏は，ボウルズをアメリカン・ゴシックの水脈に位置づけている。またボウルズ作品に描かれる主体の崩壊にエドガー・アラン・ポウの影響をみるウェイン・パウンズや，作品中の殺人や残虐な行為の効果を分析したウェンディ・レッサーの研究などもこの評価を裏付けるものであろう。さらに90年代に入ると，第三の流れとしてポスト・コロニアリズム批評の観点から文化帝国主義的にボウルズを分析することも可能になった。ただしエドワード・サイードの *Orientalism* にも見られるように，「オリエント」も「オクシデント」も造られたものでしかないとすれば，ボウルズが描くモロッコもやはり西欧人の視点によって造られたものでしかないことになる。

これらボウルズ作品の分析ではいずれも，二項対立が崩壊していく様が描かれているとはいえ，自己・他者，内部・外部，西洋・東洋という構造的な問題に帰着して論じられてしまうことが多かった。しかし，このような対立にボウルズ自身が関わっていくそもそもの社会的背景がどのような

ものだったかは，四方田犬彦氏などを除けば論じられることは少なかった。ここで近年の収穫としてボウルズ研究に新たな視点を与えてくれたのが，文化人類学者である今福龍太氏の『野生のテクノロジー』である。今福氏は同書において，ボウルズが異文化に目を向けた背景は，モダニズムおよびシュルレアリスムの持つ文化人類学的な文脈にあったと看破し，ボウルズを民族学的シュルレアリストとして位置づけている。私はここに，ボウルズ作品に見られる異文化に対するエキゾティシズムが，単にオリエンタリズムを反映しているのみならず，自らのオクシデンタリズムも映し出している点，またエキゾティシズムと切り離せないかたちでセクシュアリティが絡み合っている点を考察したい。

2）シュルレアリスト・ボウルズ

今福龍太氏が述べる民族誌的シュルレアリスムとは一体どのようなものなのだろうか。これについては，まずモダニズムと民族学が手に手を取った時代に戻ってみる必要があるだろう。ボウルズが青春時代を送ったモダニズムを，ビル・アシュクロフトは次のように特徴づけている。

> Modernism and the sudden experimentation with the artistic forms of the dominant bourgeois ideology, such as late nineteenth-century realism, are themselves, in part, products of the discovery of cultures whose aesthetic practices and cultural models were radically disruptive of the prevailing European assumptions. *Europeans were forced to realize that their culture was only one amongst a plurality of ways conceiving of reality and organizing its representations in art and social practice.* (156 emphasis mine)

20世紀初頭からモダニズムの時代にかけて「発見」されたのは，「他者なるもの」であった。ここでアシュクロフトが指摘したのは文化的な他者で

あり，異文化への視線が前景化したことである。もちろん「他者なるもの」は異文化だけではなかった。フロイトは意識の他者である無意識を発見し，男性は自らの肉体的他者である女性を意識し出す。種村季弘氏が指摘するように，モダニズムはまさに「不気味なもの」を発見する時代であった。

かくして異文化を学問的に扱う民族学が成立することとなるが，この民族学とシュルレアリスムの関わりは，歴史的に繙くことができる。民族誌的シュルレアリスムを提唱したジェイムズ・クリフォードは *The Predicament of Culture* において，1925年のパリで同時に起こった三つの出来事に注目している。ひとつはテアトル・シャンゼリゼで行われたニグロ・レヴュー。それはまさにパリっ子が「原始的で野蛮で，まったく新しい音楽を求めた」(122) 結果であり，パリはバナナを腰に巻いた半裸の黒人女性歌手ジョゼフィン・ベイカーに夢中になっていく。ベイカーの存在は異文化のみならず，女性という男性にとっての異性の肉体を強調していたことは注目に値する。同年，マルセル・モースらが Institut d'Ethnologie を設立し，さらにアンドレ・ブルトンはシュルレアリスム宣言を発表する。この一見，偶然の同時多発としか思えない三つの出来事すべてに共通しているのは，見慣れた現実ではない「現実」，異世界，他者の発見という点に他ならない。

その後1929年に——ボウルズが *Transition* で文壇デビューしたまさにその翌年——シュルレアリスムと民族学が融合された雑誌 *Documents* がジョルジュ・バタイユによって創刊されていることも看過できない。美術評論と文化人類学に関する論文や調査報告が混在するこの雑誌は「意外なものの並置を通じて，驚異的な現実という感覚」を呼び起こす（今福118)。ここでいう「意外なもの」が無意識であり，女性の肉体を媒介とするエロティシズムであり，また文化的他者がもたらすエキゾティシズムであった。クリフォードが "[b]elow (psychologically) and beyond (geographically) ordinary reality there existed another reality. Surrealism shared this ironic situation with relativist ethnography" (121) と述べて

いるように，シュルレアリストと民族学者はともに見慣れぬ現実，エキゾティシズムを求めているという点であまりにも近い存在であったことがわかる。

この異文化の持つエキゾティシズムに魅せられていったのが，他ならぬポール・ボウルズであった。ボウルズの詩がシュルレアリスムの影響を受けていたこと，30年代のパリにいたこと，またわずか2年で廃刊になってしまった *Documents* のバックナンバーを読みあさっていたこと（四方田233）などから，彼が「他者」を意識したモダニズム的な空間にいた民族誌的シュルレアリストであったとみなすことができるのではないだろうか[1]。ボウルズのモロッコには，西欧文化にとっての見慣れぬ現実が描かれる。ここで興味深いのは，*The Spider's House* に描かれるエキゾティシズムにボウルズのセクシュアリティが見え隠れするところだ。したがってこの作品からクリフォード，今福氏の提唱する民族誌的シュルレアリスムに，セクシュアリティの側面を読みとることもできると思われるのである。

3）「東洋」生産工場

The Spider's House は1954年のフェズから始まり，フェズで幕を閉じる。フェズのなかでも「古いフェズ」と呼ばれるフェズ・エル・バリ地区のメディナに住んでいる15歳の少年アマールは，〈貴き者〉として癒しの力を持つ家に生まれた。無筆ではあるが，イスラム教の敬虔な信者であり，アラーとコーランに従って生きることが全てだと信じている。一方，ジョン・ステンハムはフェズのメディナ内にある高級ホテル，メリニデス宮（現在のホテル・パレ・ジャマイ）に滞在するアメリカ人小説家である。彼はフェズで知り合ったアメリカ人女性リー・バロウズが唱える「原始的」なモロッコの「近代化」に対して懐疑的な立場をとり，消えゆく昔ながらのフェズを見守っている。

フランス軍によってメディナが包囲され，独立党とフランス軍の対立が緊張を迎えた羊の犠牲祭（アイド・エル・ケビル）前日に，アマールとス

テンハムは出会う。そのときメディナはすでにフランス軍に包囲されているので，西洋人以外の出入りができない。アマールはステンハムの召使いになりすましてメディナへ入り，ステンハムの滞在するホテルで一夜を明かす。犠牲祭当日はメディナ内が危険になり，ホテルが半ば強制的に閉鎖されることから，ステンハムはアマールとバロウズとともに，山の中の巡礼地シディ・ブゥ・シュタに行くことに決める。その巡礼地で繰り広げられる犠牲祭の饗宴は，西洋人が入ることができない時間の流れを感じさせるものだった。

オリエントという地域・文化は人工的に造られたものであり，決してもとからそこに「ある」ものではないと定義したサイードの論を出発点とするならば，私たちは「オリエント」を造るどのような文脈があったのかを知る必要があるだろう。ジェイムズ・キャリアは *Occidentalism* において，東洋は常に西洋のコンテクストでしか意味をなさないと論じている。

> [A]lthough 'the Orient' may have appeared in Oriental Studies to be a term with a concrete referent, a real region of the world with real attributes, in practice it took on meaning only in the context of another term, 'the West.(3)

「東洋」が特定の地域を指しているにしても，東洋を語ることはとりもなおさず東洋を語る西洋を語ることに他ならない。東洋を造り出しているのは，常に西洋の視線であるといえるだろう(2)。

西洋の視点でオリエントを映し出すとき――それはまさにボウルズが処女長編 *The Sheltering Sky* から一貫して打ち出してきた視点であるが――いったいオリエントの中に何が映し出されているのだろうか。いいかえるなら，西洋が東洋に求めているものは何であろうか。ここでもう一度エキゾティシズムについて考える必要があるだろう。前述したように，エキゾティシズムとは「他者の発見」であった。それは異なるもの，不気味なものの発見でもあり，魅惑と同時に嫌悪をも引き起こすものであった。

"Someone exotic arouses one's desire to colonize and the desire to be disciplined simultaneously"(Tatsumi 10) と表されるように，エキゾティシズムが内包しているのは，まさにこの正反対の感情であったと言えるのである。

人はエキゾティックなものに，常に魅了されると同時にそれを嫌悪する。そこには支配したいと同時に支配されたいという相反する欲望が併存する。このアンビヴァレントな視点は，*The Spider's House* では主に二人の登場人物に配されている。それは変わりゆくフェズをはかなむ男性ステンハムと，近代化礼賛の立場をとる女性バロウズの二人のアメリカ人が体現しているのである。この二人の立場の相違は，作品に頻繁に現れるモロッコについての議論の形ではっきりと表されている。現地の言葉も操ることができるステンハムによると，モロッコ人は「決して未開」ではないが，「自分たちの世界と外の世界を完全に分けることに固執していて，哲学の一部に仕立て上げている」(187)。さらにステンハムは西洋の文化が「なぜならば」の文化であるなら，モロッコは「そしてそれから」の文化だと捉えている。

> "What I mean is that in their minds one thing doesn't come from another thing. Nothing is a result of anything. Everything merely is, and no questions asked. Even the language they speak constructed around that. Each fact is separated, and one explained by the constant intervention of Allah. And whatever happens had to happen, and was decreed at the beginning of time, and there's no way even of imagination how anything could have been different from what it is." (187)

モロッコ人にとって今あるものは，単に「ある」のであり，何故あるのかといった疑問は成り立たない。ステンハムはこのように自分とは異なるもの，エキゾティックなものに対して魅了される (fascinated) という立場

をとっている。したがって，ステンハムにとってモロッコの独立問題は自分の関心とは関係のないところで起きている事件に過ぎない。“The city was, in a rough sense, a symbol ; that was easy to see. It represented everything in the world that was subject to change, or more precisely, to extinction” (203) と考えるステンハムにとって重要なのは，フェズは消えゆくものの象徴であるということだ。変わりゆくフェズは彼の目には「絶望的なまでに病んだ都市 (as a city hopelessly sick)」(168) として映り，彼はそんな邑をただ見つめている。

一方でバロウズはモロッコ独立を支援してはいるが，それは西洋的な尺度から見て「独立＝近代化」が必要だからという考えに基づいている。彼女が求めるのは，モロッコが西洋的な幸せを獲得することに尽きる。彼女にとってモロッコ人は「わたしたちの考えをためらいなく取り入れようとして」いて，そうしている限り彼らは「正しくて，正しくて，正しい」存在となる (286)。ステンハムのように，なにもせずただあるがままのモロッコを受けいるれることは，彼女にはできない。だからこそフェズのスラム街を見た彼女は，そのままま で充分彼らは幸せなのだと言ってのけるステンハムに激しく反論する。

> “Will you please tell me what makes you think those helpless serfs are *happy* ? Or haven't you ever given it a thought ? Are they just happy by definition because they've absolutely isolated from the world ? They're slaves, living in ignorance and superstition and sickness and filth, and you can sit there and calmly tell me they're happy! Don't you think that's going too far ? ” (238 emphasis original)

ステンハムの立場がエキゾティシズムの持つ，魅了され支配されたいという欲望を表しているとするなら，バロウズの立場が強調するのは逆に支配する欲望である。しかしながら，ステンハムの傍観する姿勢もバロウズ

の西洋化を進めたいとする態度も，結局はエキゾティシズム，つまり西洋の東洋に対する相反する視線を反映しているに過ぎない。二人の態度が西洋という東洋生産工場の生産物であるのならば，ステンハムもバロウズも西洋中心の植民地主義者でしかなくなってしまう。ところが，この二人の関係にもうひとりモロッコ人少年アマールが加わることで，西洋と東洋の関係が微妙に揺らぎ始める。

4）消えゆくものたちの根源へ

アマールは代々フェズに住むフェズっ子であり，〈貴い者〉と呼ばれる癒しの力を持つ家柄の少年である。その家柄ゆえに一目置かれる存在ではあるが，学校に行くのを拒んだがため読み書きができず，15歳になってなおリテラシーがない存在として描かれている。彼はまた熱心なイスラム教徒であり，幸福はアラーへの絶対的な服従からもたらされるという姿勢を崩さない。

犠牲祭の前日に城壁に囲まれたメディナを出たところにあるカフェでアマールがステンハム，バロウズと出会ったとき，バロウズはこの伝統的で熱心なイスラム教徒の少年をモロッコという「後進国」になぞらえて対応する。メディナをフランス軍に包囲され，メディナに入れなくなったアマールに，金だけ与えてあとは勝手にさせようとするステンハムを激しく非難するバロウズは，アマールを自分たちのホテルに連れて行くことを主張する。つまり，アマールを保護する態度に出るが，これは彼女が主張するモロッコに対する「保護＝西洋化の促進」を想起させる。彼女のアマールに対する態度はこの後も「保護」と「西洋的価値観で接する」という姿勢で一貫している。それとは対照的に，ステンハムのアマールに対する考えは紆余曲折を辿る。

カフェでアマールと話したさい，ステンハムはバロウズに向かって “You've got all morocco right here in him. He says one thing one minute and the opposite the next, and doesn't even realize he's contradicted himself” (285) とアマールを形容する。アマールの意見が

二転三転することを揶揄しても，アマールの中に「モロッコが全て詰まっている」と見るこの表現は示唆に富む。というのも，アマールとこの後行動をともにするステンハムは，次第に独立党を支持する世俗的なイスラム教徒とはちがい，イスラムの規律にのみ従って生きようとするアマールが「汚れない世界（an untainted world）を見ている」(326)「純粋な(pure)」(345) 少年として認識されていくからである。バロウズの言葉を借りれば，ステンハムにとってアマールは「若い完璧な野蛮人(a compelete barbarian)」であり「時間が停止して，人間がもとの起源に戻ったほうがいいという，ステンハムの幼稚な希望の人格化」(345) として結実している。

ここで，アマールがリテラシーとは無縁の，いわばエクリチュールを持たない「声」のみの存在であることが，意外な意味を帯びる。マリリン・アイヴィーは *Discourses of the Vanishing* において次のように論じている。

> This [broken] transmission [of tradition] is assured by the redemptive more of the dialogic presumed in its most unmediated form. That of the "voice." Michel de Certeau asserts that all returns to the past are a return to a voice, writing of the intimate linkage of voiced speech and nostos, the desire for origin. (16)

民族的な伝統を伝える「声」は即ち過去への回帰であり，起源への欲望を駆り立てるものであるとするならば，アマールの存在はステンハムの持つ「消えゆくフェズ」の起源への欲望を体現する存在だと言えないだろうか。もちろん起源（origin）そのものが幻想に過ぎないものだったとしても，ステンハムはアマールにまさにそうした幻想を見ているのであり，その幻想こそが失われつつあるイスラム伝統文化というエキゾティックな他者をエキゾティックたらしめている条件に他ならない。

5）エキゾティック・ホモセクシュアリティ

進歩主義を礼賛しアマールを保護しているつもりのアメリカ人女性リー・バロウズと，民族的伝統の起源をアマールに見るアメリカ人男性ジョン・ステンハムと，文字を知らぬイスラム教信者アマールの三人は，このようにエキゾティシズムを媒介にして関係している。ふたりの男性とひとりの女性。ふたりのアメリカ人とひとりのモロッコ人。この三人の関係に東洋の持つエキゾティシズムと東洋が表象してきたセクシュアリティがどのように絡んでくるのかを考えることは，ボウルズをエキゾティシズムを基盤とした民族誌的シュルレアリストとして解釈する上でも新たな側面を照らすことになるだろう。なぜならサイード流の西洋＝男性，東洋＝女性とする西洋と東洋の間にあるとみられるヘテロセクシュアルな関係が，*The Spider's House* に登場する主要人物の関係に，巧みにずらされたかたちで置き換えられているからだ。

西洋にとっての他者，つまり白人男性にとっての他者のジェンダーが女性として表象されてきたことはエドワード・サイード，レイナ・ルイス，メイダ・イェゲノグル，加野彩子氏らなどの論文に詳しいが(3)，ボウルズの *The Spider's House* において民族的他者であるモロッコはこの図式には必ずしも当てはまらない。例えばフランス軍にメディナを封じられ，包囲されてしまうモロッコ人ナショナリストたちを，従来通り西洋白人によってフェミナイズされた存在として見なすならば，このメディナ包囲は西洋男性による東洋女性の監禁とも取れるかも知れない。しかしながら，ボウルズが描くモロッコのイスラム社会は常に男性中心の社会であり，“[i]n Fez it was often said, half jokingly, that if the Moroccans had been really civilized men, they would have devised cages in which to keep their women”（280）と女性を語る典型的な女性蔑視の社会である。さらにアマールは「人は人だ。女は女だ。同じじゃない」（276）と言ってはばからないほど男性中心の思考をしていることがわかる。また，アマールが偶然知り合った独立党の指導者ムーレイ・アリの館には男性の執事，男性

の給仕人，さらには三人の年若い男性の党員しかいない。作中に登場する女性はアメリカ人女性バロウズの他に，モロッコ人女性としてはホテルのメイドとアマールの母と妹しかいない上に，バロウズ以外の女性が作品で果たす役割はほとんどないと言っても過言ではない。

ここまでモロッコを男性中心で描くのは，もちろんイスラム社会の男性中心的な特徴が一因となってはいるのであろう。しかしここで注目すべきは，*The Spider's House* で西洋的な枠組みの近代化を表象しているのが白人男性ではなく，白人女性のリー・バロウズであり，また東洋を表象しているのがアマールという男性中心社会に暮らす東洋人の少年だという点である。するとこの作品で描かれている西洋と東洋の対立は，西洋男性と東洋女性ではなく，西洋女性と東洋男性の対立になるということだ。つまりフェズで起きているフランス軍によるメディナの包囲には，西洋男性が東洋女性を武力行使で侵そう（犯そう）としている関係ではなく，西洋女性が東洋男性を近代化し，伝統を去勢することでまさに「出来損ないの男」にしようとしている関係が浮かび上がる。

文明化＝進歩がたえず女性として表されているこの小説で，男性であるステンハムが根源的な存在のアマールを求めていたのは，この少年が「純粋」で伝統的な起源に回帰する民族の声，男性原理を代弁する声を体現する存在だったからだとは言えまいか。ここに至って，他のモロッコ人とは違う存在としてアマールと接するステンハムは，自らとアマールの間にエキゾティシズムを介したホモソーシャルな関係を欲していたと考えられるのである。ゆえにステンハムが近代化を嫌い，アマールが近代化されない存在として描かれているのは，この小説内で近代化されることは即ち女性化されることであり，それはステンハムとアマールのホモソーシャルな関係を壊してしまいかねないからに他ならない。だからこそアマールは羊の犠牲祭の前日に西洋の危険にさらされたメディナを抜け，「何千年かは知らないがともかく充分に過去に遡って，はじめてなにがしかの真理が示される」シディ・ブゥ・シュタの饗宴に行かなければならぬのである(314)。

The Spider's House の主要登場人物は男性ふたりと女性ひとりとなっており，確かにこの男性ふたりの間にイヴ・セジウィックが *Between Men* で展開しているホモソーシャルな関係を見て取るのは可能だろう。男性ふたりと女性ひとりの"erotic triangles"における男性間の関係を，セジウィックは次のように解釈する。

> The bond that links the two rivals is as intense and potent as the bond that links either of the rivals to the beloved ; that the bonds of "rivalry" and "love," differently as they experienced, are equally powerful and in many senses equivalent. (21)

ステンハムはバロウズにヘテロセクシュアルな欲望を抱きつつ，彼女の近代化を声高に叫ぶ姿勢やヒステリックな態度に辟易する。アマールがバロウズを最初に見たとき，露出が多い服装をしていた彼女はきっと「場末の娼婦（a prostitute of the lowest order）」なのだと勘違いする（137）。つまりアマールはバロウズを軽蔑しつつも性の対象として見ていたことになる。女性嫌悪と異性愛を前提とした男性間のホモソーシャルな関係をステンハムとアマールの間に築きえたという解釈は充分成り立つし，そこから発展して彼らの関係がホモセクシュアルな意味あいを帯びてくることを想起させる箇所は作品にも散見される。例えばステンハムとともにメディナに入るアマールは次のような想像をめぐらす。

> Then he [Amar] thought of the old adage : "You can share the meal of a Jew, but not his bed. You can share the bed of a Christian, but not his meal," and he wondered if he would have to share the man's [Stenham's] bed. It was well known that many Christians liked young Arab boys. If the Christian attacked him, he would fight ; of that he was certain. (271)

アマールのホモセクシュアルな想像は杞憂に終わるけれども，ステンハムと一緒に朝食を取っているアマールを見たホテルの従業員は彼らの関係を誤解してしまう。

> There was a knock at the door, and the stout waiter came in. "Ah, *Pardon!*" he exclaimed, looking at Amar in surprise. "I thought monsieur had finished." [Stenham said] "Bring the same order again, will you? I'm still hungry. I've shared my breakfast." It was a moment that demanded brazenness. The waiter smiled. "*Une petite causerie matinale*? A little morning chat over the coffee cups is always agreeable." Still smiling, he went out. (289)

このような彼らのホモセクシュアルを想起させる関係は，しかし，セジウィック流の解釈では割り切れない部分を露呈させる。というのもステンハムがアマールを慕う時期と，アマールがステンハムを慕う時期がずれているからである。ステンハムが前述のようにアマールに対する「モロッコが全て詰まった」，「汚れない世界を見ている」，「純粋な」少年という認識が変化したのは，犠牲祭のためフェズのメディナを出てシディ・ブゥ・シュタに滞在しているときであった。宴の演奏の美しさに思わず涙を浮かべたアマールが，ステンハムに見られるのを恥ずかしく思い隠そうとしたとき，ステンハムは「美に感動することは恥であるという暗黙の了解がここでも存在している」ことを知って溜め息をつく（335)。さらに神聖な巡礼地であるシディ・ブゥ・シュタにまで独立党員が入り込んでいたのに気づいたステンハムは，モロッコも結局は他の世界と同じなのだと悟る。

> In the mouth of any but the most profound man the words: "All men are created equal" were an abomination, a clear invitation to destroy the hierarchies of Nature. ... The lie had been too

> firmly planted in their minds for them to be able to question it. Besides, he had no compulsion to save the world, he told himself, lying back to see only the sky. He merely wanted to save himself. (343-44)

ここでステンハムが述べている「自然が創造した階層（the hierarchies of Nature)」は，つまりエキゾティシズムが求める「他者なるもの」との差異や驚異だと考えることができる。その意味でステンハムにとっては「万人が平等」であってはならないはずである。しかし彼はアマールも次第に「万人と平等」な存在なのではないかと考え出す。

一方アマールがステンハムを慕い始めるのは，シディ・ブゥ・シュタからフェズに戻ってから後のこととなる。ステンハムとバロウズよりも一足先にフェズに向かったアマールは，以前に知り合った独立党の指導者ムーレイ・アリを訪ねる。メディナに入ることができないことからその館に留まることになったアマールは，アリが熱心なムスリムでないことを知り，独立党のもろさを思い知る。ここで興味深いのは，党員に権力をふりまく同胞のモロッコ人アリという比較対象があって初めて，アマールが「ある人物」への思慕を少しずつ，だが確実に認識していくところだろう。館の塔に入れられたアマールは次のように思いを巡らす。

> As he [Amar] was thinking [that Ali was not a Moslem], there came to him the unformulated memory of *another personality* ; it was only a flavor, a suggestion, a shadow, like the premonition of a presence that had been with him and mysteriously still was with him, and *a part of his mind compared it to the flavor of Moulay Ali, and found it better.* (381, emphases mine)

誰かはわからない「ある人物（another personality)」の面影は，アリのそれよりもずっと上品だったとアマールは意識する。その人物がステンハ

ムであることにアマールが気がつくのも，アリのたっての希望でフルートを演奏しているときだった。

> Thinking of nothing, he played on, and slowly the person for whom he played ceased being the figure [of Ali] by the door, became that other presence he had become aware of back in the tower early in the evening, someone whose existence in the world meant the possibility of hope. . . . [H]e heard a second music. It was not from Allah, it was here, and yet he had not known that this world had anything so precious to offer. And when he finally had to breathe, and the other music ceased, as he had known it would, as naturally as if he had been thinking of him all the time, he saw in his mind the Nazarene man [Stenham], a puzzling smile on his lips, the way he had looked in the hotel room the first evening. . . . Amar wanted to think of the Nazarene. (393-94)

アマールはアリのためにフルートを吹くことをやめ，ステンハムを想いながら演奏する。絶対服従の対象であるアラーとは違う，「世界にその人物がいることが何か希望の証であるような人物」は，おなじモロッコ人ではなくアマールにとって異邦人のステンハムだったのである。

ステンハムは「万人が平等」ではない世界，自分とは違った「他者」をアマールに求めた。アマールは上に挙げた引用からわかるようにモロッコ人男性との比較によって，ステンハムへの友愛を確認する（“He [Stenham] had been a friend.”; 394)。しかし，彼らの気持ちは決して交わることがない。ここで今一度，彼らの関係はあくまでもエキゾティシズムを介した関係であることを確認しよう。そのとき彼らが相手を思う時期がそれぞれずれていることを見逃してはならない。エキゾティシズムは前述したように，見慣れた現実ではない「現実」，異世界，他者の発見に他なら

ない。だがその他者と交わってしまった瞬間，そこにはエキゾティシズムが介在しなくなってしまうのではなかろうか。エキゾティシズムがあるがゆえに成り立つ二人の関係のために，アマールはあくまでも民族的他者に留まっていなければならず，またステンハムとアマールの互いへの友愛のためには決して交わってはいけなかったと言えはしないだろうか。だからこそアマールがステンハムへの友愛に気づいたときには，すでにステンハムはバロウズへのヘテロセクシュアルな愛を選び取っており，アマールをおいてフェズを立ち去るのである。ステンハムとアマールの間のホモセクシュアリティは他者のままでいることによって，つまり交わらないことによってのみ成り立つエキゾティック・ホモセクシュアリティであったのだ。

アマールは必死でステンハムとバロウズの乗った車を追いかけるが，決して追いつくことはない。

> The car reached a curve in the road; it passed out of sight. He [Amar] ran on. When he got to the curve the road was empty. (406)

車が見えなくなった曲がり角にアマールが辿り着いたころには，そこにはもはや何もなかった。何もない場所は何もないままにそこにある。原因と結果という西洋的な因果律に支配されない場所，ただそこに「ある」ことだけで世界が成り立っているイスラム世界から，アマールが出ることはないのである。

6）製造加工された野蛮人

ポール・ボウルズがパリのガートルード・スタインのサロンに出入りしていた頃，彼女はボウルズに向かってこう語ったという。“If you were typical, it would be the end of the civilization. ... You're a manufactured savage”（*Without Stopping* 119）. スタインは，甘やかされて育った感受

性の乏しいアメリカの若者という意味でボウルズを「製造加工された野蛮人（a manufactured savage)」と評したが，この言葉はボウルズが作りだした「他者」たちにもあてはまる。ボウルズが描く東洋もまた，ボウルズ自身によって製造加工されているのである。その「他者」たちはボウルズの作品の中では「文明の終わり」であると共に，また「文明の後退」であるべき存在なのだろう。なぜなら西洋人ボウルズがステンハムを通して求めたものは「根源」であったのだから。何千年もの時間を遡り，行き着くことがないかもしれない民族の根源へ，民族の声へ立ち戻りたいという欲望を抱え，ボウルズは野蛮人を造り続ける。そうすることにより他者たちとの決して交わらないエキゾティック・ホモセクシュアリティを夢見続けていたのではないだろうか。

他民族の発見により他者を見つけた民族誌的シュルレアリストとしてボウルズを捉えた場合，そこにボウルズがなぜモロッコのイスラム文化にこのようにも惹かれたのかという答えが隠されていると言えるだろう。ボウルズが他者に魅了されながらも嫌悪し続け，東洋が持つエキゾティシズムの中にゲイとしてのセクシュアリティを埋め込んでいた可能性が，*The Spider's House* に読みとれるように，私には思われる。

注

（1） ボウルズ自身はインタヴューにおいてシュルレアリスムとの関係を次のように述べている。"If the critics who apply the term surrealist to my writing are referring to the novels or stories, then I consider the use of the word inaccurate, of course. If however, they're considering the verse, they've entirely correct in applying the term. My prose has nothing to do with surrealism; I should think that would be clear" (Spilker 137). ボウルズは自分の詩はシュルレアリスムといえるが，小説にそれを当てはめるのはまったく見当違いだという見解を示している。しかしここで私が注目したいのは，むしろボウルズの文学的素養のひとつとしてシュルレアリスムの背景が存在するということである。

（2） 同様の意見は村上由見子氏の『イエローフェイス』でも，ハリウッドが持つアジアへの視線として展開されている。曰く，「ハリウッドの描く東洋人の姿には，アメリカ自身がアジアに抱いた想念が，ナイーブかつ

ストレートに投影されている。たとえそれが敵意や誤解に満ちた作品であったとしても，そこには時代の情勢が反映し，大衆感情が息づいていることを見落としてはならない。映画に出てくる東洋人像とは実は東洋人の姿なのではなく，アメリカのアジアに対する目線を示すものであり，さらに言えばアメリカ自身を語っているに過ぎない」(6)。

(3) エドワード・サイードは *Orientalism* において，西洋によって東洋は豊穣さ，性的な期待（あるいは脅威），官能性，あるいは女性的被浸透性などを表象するものとされたと述べている（188-207)。東洋の女性化はレイナ・ルイスの *Gendering Orientalism* の序章でも述べられているが(4)，ルイスの関心は東洋を描いた西洋女性作家との関わりの方に重点が置かれている。メイダ・イェゲノグルと加野彩子氏は，女性として表象される東洋内部の女性をめぐる問題を取り上げている点が興味深い。

Selected Bibliography

Ashcroft, Bill, et al. *The Empire Writes Back : Theory and Practice in Post-Colonial Literatures.* New York : Routledge, 1989.

Bowles, Paul. *The Spider's House*. 1955. Santa Rosa : Black Sparrow, 1990. 『蜘蛛の家』（四方田犬彦訳），東京：白水社，1995年。

---. *Without Stopping*. 1972. New York : Ecco, 1985. 『止まることなく』（山西治男訳），東京：白水社，1995年。

Carrier, James G., ed. *Occidentalism: Images of the West*. Oxford : Clarendon, 1995.

Clifford, James. *The Predicament of Culture*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1988.

Green, Michelle. *The Dream at the End of the World*. 1991. New York: Harper, 1992.

Haraway, Danna. *Primate Visions: Gender, Race and Nature in the World of Modern Science*. New York: Routledge, 1989.

Ivy, Marilyn. *Discourse of the Vanishing: Modernity, Phantasm, Japan*. Chicago: U of Chicago P, 1995.

Lewis, Reina. *Gendering Orientalism: Race, Femininity and Representation*. London: Routledge, 1996.

Patteson, Richard. *A World Outside: The Fiction of Paul Bowles*. Austin: U of Texas P, 1987.

Paul Bowles: The Complete Outsider. Videocassette. Dir. Catherine Warrow and Rigina Weinreich. First Run Features, 1993. 57min.

Said, Edward. *Orientalism*. New York: Vintage, 1978.

Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male*

Homosocial Desire. New York: Columbia UP, 1985.
---. *Epistemology of the Closet*. Berkeley: U of California P, 1990.
Spilker, John. "Paul Bowles Interviewed." *Conversation with Paul Bowles*. Ed. Gena Dagel Caponi. Jackson: UP of Mississippi, 1993. 135-44.
Tatsumi, Takayuki. "New Exoticism in American Literary History of the 1990s or Independence Day." The Kyoto American Studies Summer Seminar. Kyoto, 2 Aug. 1996.
Yegenoglu, Meyda. *Colonial Fantasies: Towards a Feminist Reading of Orientalism*. Cambridge : Cambridge UP, 1998.
今福龍太 『野生のテクノロジー』 東京：岩波書店，1995年。
加野彩子 「日本演劇と帝国主義——ロマンスと抵抗と」『日米女性ジャーナル』第23号（1998年）：19-48頁。
種村季弘 『魔術的リアリズム』 東京：PARCO 出版，1988年。
村上由見子 『イエローフェイス——ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』 東京：朝日新聞社，1993年。
四方田犬彦 「砂漠/蜘蛛——ポール・ボウルズの余白に」『現代詩手帖特装版 ポール・ボウルズ』 四方田犬彦監修 東京：思潮社，1990年。230-36頁。
『ユリイカ 特集ポール・ボウルズ』 1994年，3月号。
『ユリイカ 特集クイア・リーディング』1996年，11月号。
『ユリイカ 特集エキゾティシズム』1997年 8月号。